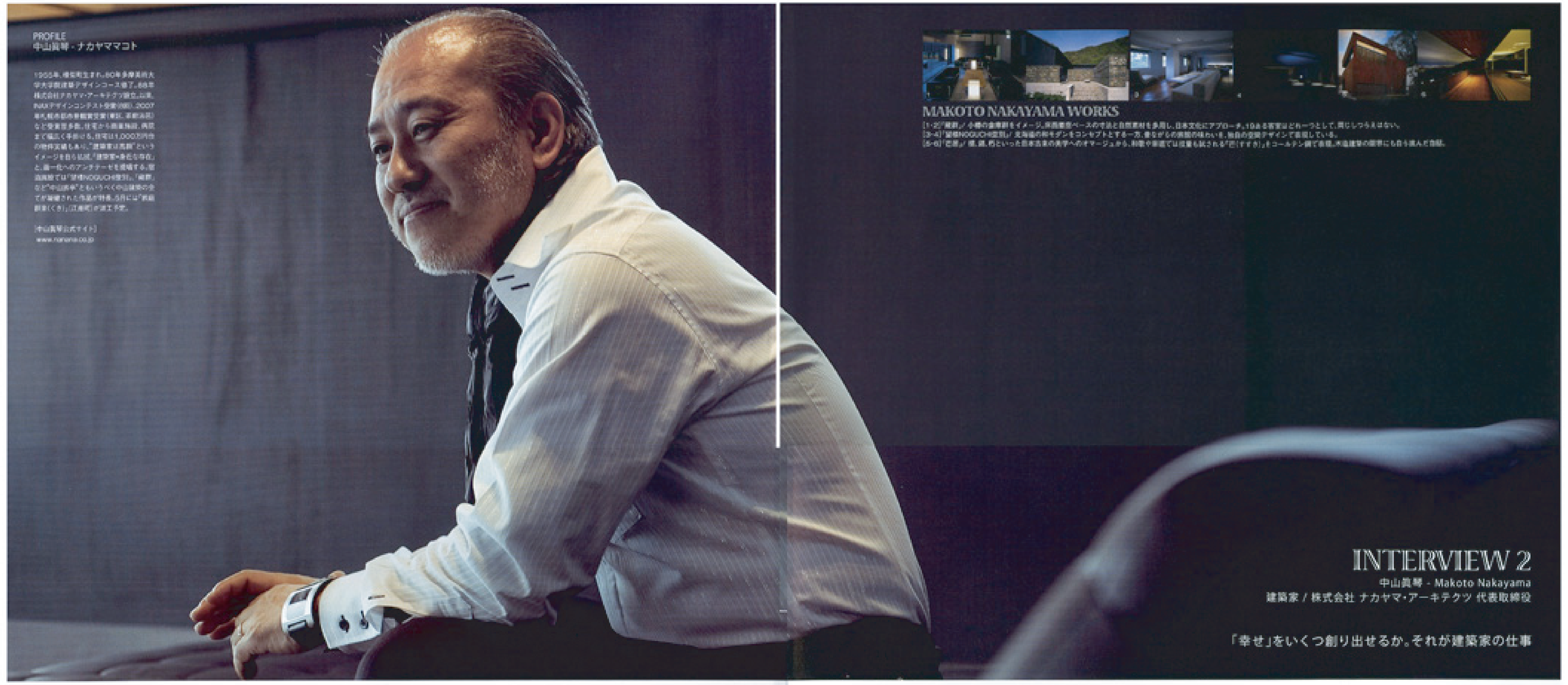
[illegible]
STATUSdesign
No. 05
[illegible]
SAPPORO ISSUE 北海道新聞
QUARTERLY FREE MAGAZINE

COVER INTERVIEW
KEISUKE MATSUSHIMA
松嶋 啓介
ミシュランは通過点
描いた夢叶え、そして日本から



PROFILE
中山眞琴・ナカヤマママコト

1955年、横須賀生まれ。80年多摩美術大学大学院建築デザインコース修了。88年株式会社ナカヤマ・アーキテクツ設立。以来、INAXデザインコンテスト受賞(88)、2007年札幌市都市景観賞受賞(東区、[illegible])など受賞歴多数。住宅から商業施設、病院まで幅広く手掛ける。住宅は1,000万円台の物件実績もあり、"建築家は高額"というイメージを自ら払拭。「建築家＝身近な存在」と、画一化へのアンチテーゼを提唱する。宿泊施設では「望楼NOGUCHI登別」、「蔵群」など"中山旅亭"ともいうべく中山建築の全てが凝縮された作品が特徴。5月には「旅庭群来(くき)」(江差町)が竣工予定。

[中山眞琴公式サイト]
www.nanana.co.jp

MAKOTO NAKAYAMA WORKS

[1-2]「蔵群」/ 小樽の倉庫群をイメージ。床面積京間ベースの寸法と自然素材を多用し、日本文化にアプローチ。19ある客室はどれ一つとして、同じしつらえはない。
[3-4]「望楼NOGUCHI登別」/ 北海道の和モダンをコンセプトとする一方、昔ながらの旅館の味わいを、独自の空間デザインで表現している。
[5-6]「[illegible]」/ [illegible]といった日本古来の美学へのオマージュから、[illegible]される「芒(すすき)」をコールテン鋼で表現。木造建築の限界にも自ら挑んだ自邸。

INTERVIEW 2

中山眞琴 - Makoto Nakayama
建築家 / 株式会社 ナカヤマ・アーキテクツ 代表取締役

「幸せ」をいくつ創り出せるか。それが建築家の仕事

Text : Yosuke Takahashi
Photo : Shinichiro Tanaka

建築で幸せになれる
人も街も

—建築家という道を選んだきっかけを教えてください。

中山　中学生の頃、友達の家で何となく読んだマンガの主人公が、すごく変わった家に住んでたんです。その家のカタチに惹かれて「俺は建築家になる」と思い立ちました。冗談のようですが本当の話です。その足で帰りに本屋さんに寄って、建築士試験の本を読みあさりました。どこの大学に行けばいいかと目星をつけたり、一級建築士の問題集を買ってみたりもしたけど、当然そこに書かれている意味なんて何も分からない。そこで、「僕は本当に建築家になれるんだろうか」と、一人で悩んでましたけどね。

—中山さんはいつも、「建築家という存在は、もっと身近なものだ」と主張されていますね。

中山　建築家って、弁護士や医者にも似た取っ付きにくさがあるようですが、実際はそうじゃないんです。せっかく家を建てるのに、「手間賃が高そう」とか「話が面倒くさそう」と、全てをメーカーなど他人任せにするのは、あまりにもったいない話。家は日々を過ごす場所ですし、そこに長い間住み続ける訳ですから、自分の意見をしっかり反映すべき。そこでお役に立てるのが私流。建築家は、一人一人の要望を具現化させるお手伝いさんなんです。

—とはいえ、一般の人々は「建築家＝芸術家」的なイメージを持っている人も少なくないのでは。

中山　確かに、そんな建築家もいるかもしれません。例えば、見た目だけで中身が伴っていない家だとしたらどうでしょう。汚れやすかったり、使い勝手が悪かったり。最初は「先生が作ったカッコいいデザインだから」と許せても、そういう我慢は日に日に辛くなってきます。それはプロの仕事じゃないと思う。

—では、中山さんの考える理想の家づくりとは。

中山　住む人が幸せになれる家。人生を変えるきっかけの媒介となるような家。それは可能だと思うし、実際そうなった例も見て来ました。離婚寸前の夫婦が仲良くなったり、無趣味だったはずの人が部屋に置く民芸品のデザイン一つから気にするようになったり。住み心地が良いと毎日が楽しくなるんです。そんな家を一軒でも増やしていきたい。[illegible]の芸術作品的な家をポツンと作るのではなく、見ても、住んでもハッピーな家を増やして、街の景観そのものを明るく豊かにしたいですね。

—影響を受けた海外の建築などはありますか。

中山　海外では建物のデザインそのものより、街作りとか、その国の人々の考え方に影響を受けることが多いですね。僕が最初に行った海外はバンクーバーでしたが、もの凄いショックを受けました。生活水準が高くない地域でも玄関には花が飾られて、芝もきちんと手入れされている。ビルが建つ時も、日照権がどうとか、自分の利益を主張するだけじゃない。ビル周辺の道路や歩道を街並みに合った形で整備してくれたらOKだとか、住民みんなが街のことを考えている。日本は何でも「俺が俺が」。経済的には勝っていても、心の豊かさでは負けています。札幌の街も確かにきれいだけど、まだどこか寂しさを感じています。

—そこには、国の、建築物に対する法律的な問題も影響しているのでは。

中山　それはありますね。北海道と沖縄では生活環境が全く異なるのに、一つの法律で規制するには限界があると思う。例えば車庫。これだけドカ雪が積もる地方だから、やっぱり車庫が欲しくなりますよね。でも後から車庫を作ろうとしたら建ぺい率の問題が云々、と言われてしまう。実生活にマッチしていない面が多々あります。法律が法律として活かされていない。

貪欲さとこだわりをもっと
厳しいから生きる良さ活かせ

—建築家を目指す若者に期待することは。

中山　私は今、大学の講師も務めていますが、120人くらいの建築学科の学生の中で、本当に建築家を目指しているのは2〜3人。あとは就職のために来てる。それは違うだろうと思う。「建築学科に来るなら建築家を目指せ」と言いたい。僕らの時代は建築学科といえば、大半が建築家志望でした。給料が高いとか安いとかなんてことは考えず、とにかく建築家になりたかった。たまに中国に行ったりすると、向こうの若者の貪欲さに圧倒されますよ。彼らは本気で知識を吸収しようとするし、本気で働いています。

—貪欲さとこだわりがないと。それは大人の責任でもある気もします。

中山　昔はまず事務所の前に何日も座り込んで、何とか拾って入れてもらうことから始まってた。要は弟子入りですね。で、とりあえずご飯は出て来るから、生きてはいけた。まぁ、給料らしきものも、多少は頂いてましたけどね。そんな生活が当たり前だったし、目標があったから頑張ることができた。今はなりたいと思う職業の情報が、魅[illegible]均化するのではなく、「これは個からないし大変だけど、お金には代えられないこんな素晴らしいことがあるんだ！」というように、仕事の魅力を明確に開示した方がいいんじゃないかな。「こんなはずじゃなかった」と、すぐ辞めてしまう人が多い。介護事業などがまさにそういう状況ですね。

—札幌は日本一住みやすい街と言われていますが。

中山　北海道は寒いから家族がくっつき合って暮らし、街中でも手をつないでる人が多い。何気ないけど、大事なことです。雪でクルマがスタックした時も、周りはそれが当然だろうと関係無しに、みんなで助け合う。中途半端な寒さじゃないからいいんだろうね。東京の冬は辛い。半端だから。北海道の冬は、お金持ちにも普通の人にもみんな同じ。お天道様の下では、吹雪でみんな一緒にやられちゃう。だから仲間意識が生まれるんじゃないかな。歴史は浅いけど、そんな良い面もある。だから街づくりも、もっと特長をもった方がいいと思う。単に都会志向を目指すだけでなく、外壁は赤レンガを使わなきゃいけないとか、共通の札幌らしさを持つべきですよ。

—将来、手掛けてみたい建築物はありますか。

中山　美術館。美術館をやりたいというのは、建築家にとって一つの到達点かもしれない。でも、住宅でも美術館でも大きな違いはない。どちらも、どれだけ人に幸せを与えられるかが大事。これからも、この部分にはこだわっていきたいですね。

—最後に、中山さんにとってのステイタスとは。

中山　死ぬまで現役でいること。最後まで鉛筆を握っていられたら幸せ。僕なんてまだまだ駆け出しですよ。昔は建築家は、50歳で「新人」って言われてましたから。90歳くらいにならないと、建築という仕事の真髄は見えて来ないんじゃないかな。

"中山旅亭"の第三章がいま、江差で開幕する

例年8月、その起源は360有余年も前に遡るといわれ、蝦夷地最古の祭とされる「姥神大神宮渡御祭」が挙行される。そこは、かつて鰊の群来(くき)に湧き返り、北前船による交易で繁栄した江差。いにしえの姥神伝説に登場する神島"カムイシリ＝現、鴎島(かもめじま)"の入り口にこの春、「旅庭群来」が静かにオープンする。

設計は「望楼NOGUCHI登別」や「蔵群」で知られる、北海道を代表する建築家、中山眞琴。隠れ家的建築を多数手がけている建築家による今回の「群来」は、彼がこれまでそうしてきたように、自然界に普通にある素材を生かして創られている。外張り材には黒塗りの道南杉を使用。屋根には、商家として繁栄を極めた旧中村家住宅でも同様に見られる玉石を敷設している。

客室はわずか7室。通常50㎡あれば十分広いといえる客室はテラスを含め約80㎡と、道南の悠久のときを感じさせるゆとりの空間。それぞれが「離れ」をイメージして独立しており、リビングと和室、寝室、源泉かけ流しの浴室が贅沢に配置され、全室から日本海を眺望できる。内装にはそれぞれ異なるしつらえが施され、宿の常連になったとしても、滞在はいつも心地よい新鮮な刺激に満ちていることだろう。

噛み締める程に訪れる価値が分かる、そんな宿がまた生まれる。

旅庭 群来[5月OPEN予定]
江差町字姥神町1-5
[問合わせ]0139-52-2020(準備室)[4月より受付開始予定]
1名1泊2食40,000円(2名1室、税サ込)～(予定)